

採卵鶏の経済的飼育期間

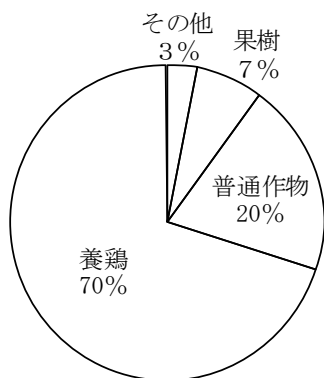
吉備郡高松町生石養鶏クラブ
大角 恭二

一. 着想の動機

昭和22年農業を始めました。当時40 a。限られた水田に於て戦後派農家の共通性である掠奪農業を繰り返して居りましたが低位生産性と僅かな農業収入とに対し将来の発展策もさる事乍ら当面の問題の解決策として第一に耕地面積の拡張をねらい山林開墾に依る果樹園の開設と同時に当時の肥料事情緩和の為自給肥料生産の必要上、又収入増加対策としまして養鶏を導入することになりました。最初30羽の鶏より逐年増羽しまして現在は第1表の通り養鶏主体農業を営んで居ります。

鶏経営診断を実施しました際高松地区として、養鶏に於ける収益を高め経営を有利に導く一手段として実施した点灯飼育が数ある経済効果の内最も優れた実績を上げる事が出来たのであります。これは老廃鶏を主とした更新予定鶏に対する点灯効果でありまして、これを参考として尚一段と養鶏経営を集約化し更に純収益度を高める様、確実なる採算目標を種々検討した結果、先ず第一段階として初産開始より15~17ヵ月間の点灯を応用した無換羽、強制産卵をとりあげ実施した次第であります。

(第1表) 1. 経営概況



三. 計画

計画として(2表)の様な採算目標を樹てたのであります。これらすべて私の過去の実績を総合判断した数値に基き実現可能と思われる範囲内の無理のない程度の努力目標としました。この目標の第1飼育期間は、育雛6ヶ月、産卵期間17ヶ月、鶏の一生を合計23ヶ月間としました。

第二飼育費 これは養鶏支出の80%を占めると言われ、価格の安い程有利になるので一定の発育産卵に必要なだけの栄養価を持っていて単価の安いことを望むのであります。今日の飼料原料費から検討して市販完全配合自家配合によらず産卵期間中平均1日1羽当3円50銭とみた。各種添加物を含めた飼料代であります。第3に産卵率でこれは前の飼料費、次の淘汰との関係が深いのであります。素質の良い雛を充分育成することを前提とし、又点灯の効果を併せ考えると平均60%位は産む筈であります。又淘汰は今日の養鶏採算上最も考慮すべき点で死亡淘汰の度合如何によって経営を左右する基となる。これも強健で産卵能力の高い系統を飼育することを前提として、産卵12ヶ月間で25%、17ヶ月目で40%程度を死亡を含めた淘汰の目標としたのであります。月平均2~2.5%) 尚卵価格1コ平均10円とみて、各項目毎に詳細な収支計算をした結果100羽単位、1期間の粗利益として7万5,000円を目標に計上しました。此の粗利益7万5,000円と言

2. 経営規模

労力	能力	男女	0.8 1
農機具	チョッパー		2
	モーター		3
	乾燥機		1
	カッター		2
	トラクター		1
家畜	ブロイラー		300羽
	鶏		400羽
耕地	園地		20 a
	畑		5 a
	水田		70 a

二. とり上げた理由

採卵の飼育期間の問題をとり上げた理由は昨年養

岡山畜産便り1960.03

うのは設備の償却と人件費だけ除外して他の経費は全部差引した金額であります。それは平飼と立体飼育

との場合により設備費に大きな差が生ずるので実績面では計算に入れます。目標では一応除外しています。

(表の2) 養鶏の採算目標

養 鶏 の 採 算 目 標																		
飼料費 1羽1日	1円	2円	3円	3.5円					3.5円					3.5円				
	平均 2円			平均 3.5円														
淘汰率	10%			10%					10%					10%				
産卵率	65			75	70	60	40	50	60	75	70	60	60	60	60	60	50	50
	62%			66%					60%					53.3%				
	平均 60.3%																	
飼育期間 23ヶ月	育雛期間 (6ヶ月)						産卵期間 (17ヶ月)											
							点灯 (5ヶ月) 14時間					14~16時間点灯17~20時間 (5ヶ月半)						
3月. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 1.																		

四. 実施

説明を簡単にするため100羽当りの換算で、春雛を育成し、秋の11月より出発して翌年の夏9月から点灯を始め3年目の3月一杯までの調査をまとめてみますと(表の3)

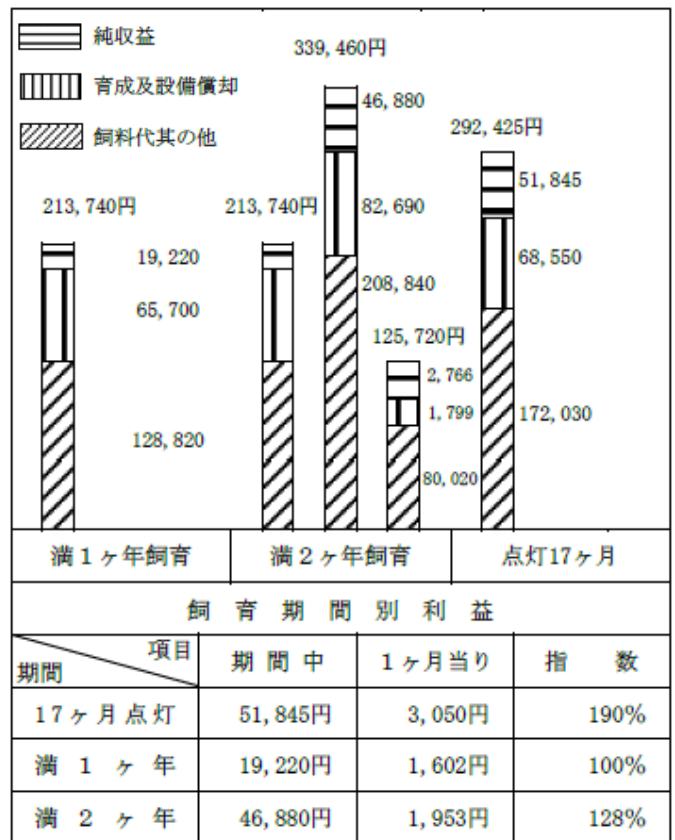
100羽で育雛からスタートし初産開始から17ヶ月間で上げた。鶏卵、糞、食鶏等収入合計29万425円、支出合計24万580円差引、5万1,845円の純利益を得ることが出来ました。これは人件費をみてないので労働報酬を含めた利益であります。

此の時(17月目)残った鶏は55羽で期間中の平均産卵率59.2%となり目標に比較し淘汰率で5%,産卵率で約1%程度及ばなかったものであり、又、卵価はほぼ同じであり、飼料費は全量自家配合を使用した関係で3円30銭ですました。又、目標に表わしたと同様の算出方法によった場合は粗利益6万395円となって約1万4,000円目標額に足らなかったがこれは若めすの育成費に於ける差約1万円と淘汰と飼料費との関係に原因がある。僅かの羽数でも1回限りの実績ではあるが初期の目的に対し大きな確信を得ました。

五. 比較

次に比較対照するに同一条件で仮定し従来の無点灯の場合に於ける収益を計算すると(3表説明)産卵開始後満1ヶ年の飼育期間に於ける収入合計21万

(表の3) 損益計算比較



3,740円 飼料費、償却費等支出合計19万4,520円 差引純益1万9,220円となりこの1年目に残った鶏70羽を更に1年飼育すると最終的には46羽に減り2年目丈の差引純益は2万7,660円 これを初年度から累計で表しますと満2ヶ年飼育による純益は4万6,880円

岡山畜産便り1960.03

となります。

次に此の様に三つの期間内に得た利益金と飼育月数で割った各1ヶ月当りの利益は表3の通りであります。

此の様な利益の差の出来た原因を分析すると1ヶ年、2ヶ年飼育の場合の各月末に於ける収支残高(粗利益)を図示しますと表4のとおりであります。

此の表で明らかな様に此の2年目の秋から3年目の始めに亘る深い収入の谷間が出来ています。此の谷間は秋から冬にかけての換羽に依る産卵減退の結果、鶏卵販売高の低下の現れであります。この頃の卵価は5表に現れている通り年間を通じてみて概して高い水準を維持している季節であります。この秋の産卵率を高めることが出来ると利益も当然増加する筈で、これが現在の養鶏に於ける最も優れた飼育技術だと考えます。普通の鶏の産卵の状態をみると春雛の場合孵化後5~6ヶ月で初産以後1年間産み翌年の秋換羽休産し再び産卵を継続することを年々繰り返すのでありますが経済年限は一般に3年位と言われている。そしてこの様な鶏の生理による換羽休産を防ぐ一番手近な方法の点灯飼育を実施しました結果予想通り換羽を抑制し産卵を継続して、この谷間を完全に埋めつくしたばかりか逆に大きな利益の山が出来たのであります。これは即ち一定期間内の飼育に於いて換羽中に休ませて徒食させると換羽休産したら直ちに淘汰して更新鶏を補充育成して置く場合との経費の比較になったのであります。

これら飼育記録及び数字の基礎は総て平面鶏舎群飼の場合で、これが最近目ざましい普及をして居ります。単飼ケージに収容飼育した場合は更に点灯効果も高まり設備の償却等少く資本効率を高めたより豊かな経営となる事が容易に予想されるので本年はこのケージを採用して実施して居ります。

六. 反省

結論として現在の鶏の能力、飼料価格、卵価等の関係より総合判断した採卵鶏の経済的な飼育期間は現在の処計画的な点灯応用による15~17ヶ月間の飼育が最も有利ではなかろうかと考える次第です。

七. 将来計画

以上の様な経験を基礎として将来私の経営は養鶏を更に増羽して来るべき不況時に対処すると共に飛躍した発展を望み度いと考えるのであります。昨今の養鶏界は一つの過渡期にあると言えるものであり、いわゆる薄利多売と言う経済界の動きが養鶏をも、その外に置く事を許さなくなったのであります。当然羽数の増加を計画する訳でありますが無闇に増羽するのでなく従来あり勝ちな羽数の増加に伴うロスをなくして農家養鶏と雖も原始産業から脱皮した現代企業として十分成り立つ1,000羽単位の豊かな経営にし更に地域産業の発展にまで推進するよう大きな夢を持ちながら日夜友と語り鶏と共に希望に充ちた日日で働いております。

(表の4) 17ヶ月飼育 2ヶ年飼育の月末残高比較

